

































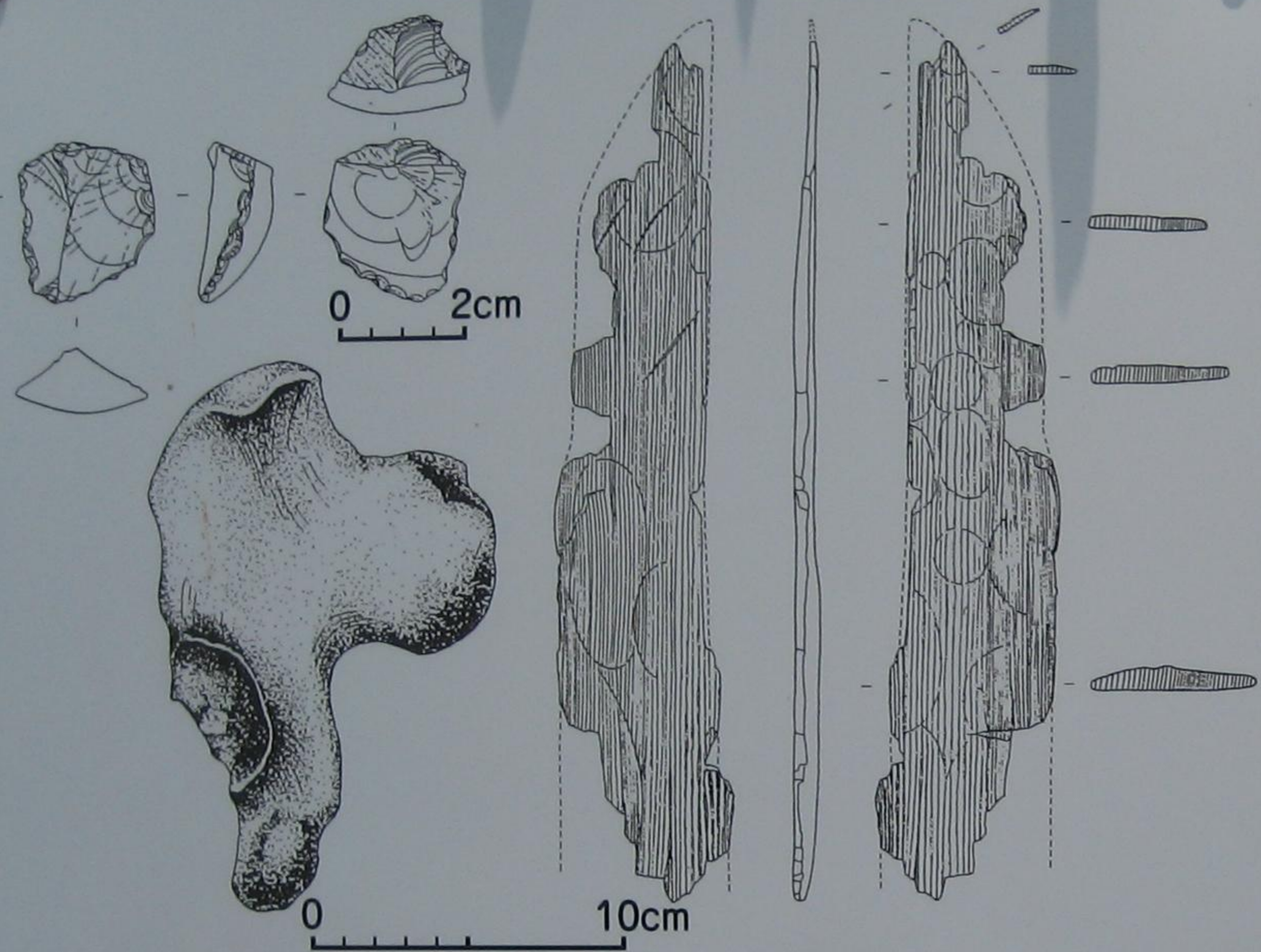
「明石原人」腰骨発見地

昭和六年（一九三一）四月十八日、当時、明石に在住の直良信夫氏（元・早稲田大学教授）は、この付近の崩壊した崖の砂礫層中から、人類の腰骨を発見した。

腰骨は戦争中に焼失したが、昭和二三年（一九四八）長谷部言人氏（元・東京大学教授）は、ニッポナントロプスIIアカシエンスの名を与え、一般には「明石原人」と呼ばれるようになった。

昭和六十年（一九八五）三月、国立歴史民俗博物館の春成秀爾助教（現・教授）を中心とする調査団は、この西側を発掘調査して、六〇二万年前の木器や石器の出土を確認した。

現在のところ、近畿地方でもっとも古い人類の遺跡の一つである。



木器・石器・人骨

平成十二年九月

明石市教育委員会





